

# 百年史編纂の経緯

学院史資料センター事務局

## ■ はじめに

『西南学院七十年史』（以下『七十年史』）編纂時は、学院史編集室（専任職員2人）が事務局を担当した。しかし、編纂にかかる担当業務の記録としては、手書きの大学ノート2冊が残されているのみである。当然、それだけでは『七十年史』編纂作業がどのように進められたのかは知る由もない。『西南学院百年史』（以下『百年史』）編纂の事務局として、どのような組織で、何から始めて、何をどのように進めていけば良いのか皆目分からず、暗中模索、手探りの状態で作業を進めるしかなかった。

次の『西南学院〇〇〇年史』を担当する人たちが私たちのように困ることがないように、という願いを込めて、この紀要に『百年史』編纂の経緯を残すことにした。以下、編纂過程においてポイントとなった部分や次の年史編纂作業での留意点などを記述し、最後に、編纂の過程を時系列に記した表を掲載した。

## ■ 組 織

『百年史』の発行母体は西南学院であるので、その内容について、学院としてオーソライズ（承認）してもらう必要から、学院の常任理事会を最終決定機関とした。よって、その構成や内容についても、常任理事全員に目を通してもらった（「資料編」は構成確認のみ）。実質的な組織としては、編纂委員会を親委員会として、その傘下に総論を担当する学院史部会、各論を担当する各部会、監修を担当する監修委員会（監修委員会、編纂小委員会、合同監修委員会）を設けた。

編纂作業が効率的に進むように、委員会は数や構成員が多くなり過ぎないように心がけた。作業の過程において、学院史部会は編纂委員会が兼ねることとし、監修委員会と編纂小委員会は合同監修委員会に一本化するなど、さらなる効率化を図った。

## ■ 執 筆

『百年史』編纂のために最初に設置した百年史編纂諮問委員会（2005.4～2006.11）において、『七十年史』の検証を行い、執筆者が特定の者に限られたこと（正確な人数は不明だが10人前後）、特にそのことで教職員の参画意識が得られなかったことが問題点として挙げられた。この反省に立って、当初、総論は原則として編纂委員と事務局で執筆する（11人）ことにしたが、その後、歴史の経験者には当該部分の執筆をお願いすることにした。その結果、総論が26人、各論58人という大人数（延べ数）になった。『七十年史』の反省はクリアできたが、監修において、執筆者の筆致を整える作業に労力と時間を要することになるとともに、事務局の執筆者への対応も煩雑となった。やはり、執筆者は50人以内に留めるのが妥当であろう。

一方、監修によってかなりの修正が加えられた。そのことを想定して、編纂委員会では、執筆者が具体的にどの部分を執筆したのかが読者には分からないように配慮し、執筆者は巻末にまとめて50音順で掲載した。そして、『百年史』の記述内容については、編纂委員会が全ての責任を負うことにした。数人の執筆者からは「これだけ修正が入れば、執筆者として責任は持てない」との声も出たが、前記の対応を説明して納得してもらうことができた。

## ■ 監 修

監修は次の要領で実施した。

- ① 総論、各論ともに、まず原稿が出揃った時点で、総論は各章単位、各論は各学校・園・事務局単位で執筆者に集まってもらい、全体の流れ、各項目の文字数のバランスなど全体的な視点からの確認を行った。
- ② ①で修正を行った原稿を監修委員会で監修した。第1回の監修で大幅な修正を行った初校紙を執筆者に確認してもらった。同時に、印刷関係をお願いした大日本印刷株式会社（以下「DNP」）の校正担当者にも回付し、校正を依頼した。校正紙の受け渡し等は、DNPの専用情報交換ソフト「イメージワークス」を使用した。
- ③ ②で執筆者の了解を得た校正紙にDNPの校正を加えて、もう一度監修委員会で監修を行った。その結果を編纂委員と常任理事に回付し、そこで出された修正箇所を再度、監修委員会で確認した。これで、監修作業はほぼ完了した。この校正紙を最終的に執筆者に戻して、最後の確認をお願いした。

## ■ 次の年史作成のために —『百年史』編纂の反省を踏まえて—

他大学の大学史担当者の間では、「50年史だったら少なくとも5年前から、百年史だったら少なくとも10年前から編纂作業に取り組む必要がある」との不文律がある。しかし、これはあくまで「編纂作業」であって、それ以前にやっておかねばならないことがある。主に以下の点である。

### ① 執筆に必要な資料の準備

資料の収集・整理は、年史の編纂に関係なく常日頃からやっておく必要がある。『百年史』の場合、執筆作業に入る前に十分な資料を整えて、それらの資料を示して執筆を依頼すべきであったが、基礎的な資料しか提供できず、執筆者からの「こんな資料はないか」との依頼に応じてその都度、資料を提供していくという有様であった。特に、国立公文書館や米国南部バプテスト歴史古文書館における資料収集は、執筆作業と並行して行うことになってしまった。大きな反省材料である。

なお、執筆者には資料提供の一環として学院史資料のデータベース（デュアルシーブ）を学内の個人用パソコンから閲覧できるようにする予定であったが、システム上、事務局以外はできないことが判明し、急きょ、各学校・園ごとにパソコン数台を設置して対応した。

### ② 執筆に必要な詳細な年表作成

①の資料の収集・整理と併せて詳細な年表があれば、執筆作業の準備は8割方整ったと言っても過言ではない。次の年史作成を見据えて、これらのことを今からきちんとしていく必要がある。

### ③ 研究会活動の活性化

現在、学院史資料センターに所蔵している資料の中には、宣教師文書、バプテスト関連資料、『西南学院大学新聞』、中学部教務日誌や学友会雑誌、その他学生生徒が発刊した刊行物など、十分に目を通していない資料が多数ある。いずれもかなりの分量である。これらを全て読み込んで、必要な情報を百年史編纂に活かすべきであったが、いかんせん、量が多く、その作業を執筆者が行うのは不可能と言わざるを得ない。これらについては、今後、個人やグループによる研究会で対応し、その成果を『資料センター紀要』などに残し、次の年史編纂時の参考資料とするという手法が考えられる。

以上の他にも、反省点や気づきは多くあるが、本誌の「座談会」での出席者の問題提起に譲りたい。

『西南学院百年史』編纂の経緯（2005.3～2019.5）

年月	実施事項	所管	詳 細
2005.3	百年史編纂諮問委員会設置	常任理事会	<p>『西南学院百年史』（以下『百年史』）編纂作業着手前に以下の必要な事項の調査・研究を行い、常任理事会に答申することになる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①『西南学院七十年史』（以下『七十年史』）の検証</li> <li>②他大学年史の調査・研究（内容・編纂体制・作業等）</li> <li>③学院史資料の調査・整理</li> <li>④『百年史』編纂方針の提示</li> <li>⑤その他</li> </ol>
2005.4 ～ 2006.11	百年史編纂諮問委員会において『百年史』刊行の必要性、大まかな編纂方針を協議し、常任理事会に答申。	百年史編纂諮問委員会	<p>同諮問委員会は、以下のような答申を2006年11月に院長に行った。なお、『百年史』編纂に向けて『西南学院史紀要』（以下『紀要』）の継続的な発行が必要であるとして、2006年5月に『紀要』創刊号を発刊した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①『七十年史』は、執筆者が少人数に限定されるなど学院の共同作業としてのあり方に問題がある。また、編集室長の専門分野でもある「前史」が200ページ以上あり、その位置付に問題がある。</li> <li>②『百年史』刊行に向けて、遅くとも90周年時（2006年）中には編纂作業の準備に取りかかるべきである。</li> <li>③写真の未整理が目立つことや学外保管の資料（国立公文書館・ミッションボードなど）収集が必要。</li> <li>④『百年史』の構成は、「通史編」と「資料編」とするのが好ましい。通史編は最低でも10人以上の執筆者を置く。可能であれば、『教育者群像』の発刊も考慮する。</li> <li>⑤実務委員会として百年史編纂準備委員会を設置するが、最終責任は常任理事会とする。</li> <li>⑥現在発行している『紀要』は、調査・研究の成果公表の場として、継続して発行する。</li> <li>⑦分散している諸資料を整備して一元化するとともに、定期的な展示が必要。</li> </ol>
2006.11	諮問委員会答申を承認し、百年史編纂準備委員会を設置。	常任理事会	<p>『百年史』刊行に向けて、具体的な編纂作業に取り組む前に必要な組織、作業、『百年史』編纂の基本方針、構成の大枠などを検討する準備委員会を設置する。</p>
2006.11 ～ 2010.3	百年史編纂準備委員会において、具体的な編纂作業に取り組む前に、必要な組織、編纂の基本方針、構成の大枠などを検討した。あわせて、編纂に必要な資料の再整理などの作業を行った。	百年史編纂準備委員会	<p>百年史編纂諮問委員会答申の常任理事会承認を受けて、百年史編纂準備委員会を設置した。同委員会は、以下のような活動を行い、その報告を2010年3月に院長に行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①『七十年史』刊行時に使用した資料の再整理を行い、『百年史』執筆の便宜を図るとともに、資料の補充を行った。</li> <li>②『教育者群像』の刊行を目指し、そのために必要な役職者や宣教師の略歴などをまとめたが、刊行には至らなかった。</li> <li>③『紀要』は、継続して発行した。</li> <li>④『百年史』の具体的な編纂作業に取り組む百年史編纂委員会の設置と構成を次のとおり提案した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・委員長：院長</li> <li>・委員（各学校長・園長・事務局長）</li> </ul>                     委員の互選により、編纂の実務を担当する編纂実行委員会を置く。委員は、各部会を編成し、各学校・園・事務局の編纂を担当する。                 </li> <li>⑤編纂の基本となる「百年史編纂委員会内規」を制定し、あわせて「編纂事業の取り組みについて」を決定。後者では、「編纂の基本方針」「通史編（全1,000頁2017年発刊）、資料編（全1,000頁2016年発刊）、『西南学院と建学の精神』（全300頁2016年発刊）を作成する」「通史編の章立て」などを決定。「編纂の基本方針」に「日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視する」とあることから、総論各章の前に「時代背景」を挿入することとした。</li> <li>⑥学内に分散して保管されていた資料を再整理し、資料目録を作成するとともに、2007年には本館4階1ヵ所に集中して保管した。</li> </ol>

年月	実施事項	所管	詳細
2010.5	百年史編纂準備委員会の活動および報告を踏まえ、具体的な編纂作業を行う百年史編纂委員会設置を決定。	常任理事会	『西南学院百年史』の刊行を西南学院100周年事業と位置づけ、実質的に編纂作業を行う編纂委員会の設置と構成員を決定。ただし、構成員については、最終決定機関が常任理事会であることを踏まえ、常任理事を外すなど、構成員を変更した。編纂委員会は、編纂準備委員会で決定した編纂の基本事項を踏まえ、『百年史』刊行を目的とし、『百年史』の詳細な構成、予算、その他編纂に必要な事項を決定・担当するものとした。
2010.6	第1回百年史編纂委員会開催		2018年12月17日の第62回開催で終了。
2011.4	各部会を設置	編纂委員会	通史編は、学院の歴史を記述する「総論」と各学校・園などの歴史を記述する「各論」の構成とし、総論の編纂作業を担当する学院史部会、各論の編纂を担当する6部会（保育所、幼稚園、小学校、中学校・高等学校、大学、事務局）を設置。部会長と部会構成員を決定した。あわせて、通史編の総論と各論の執筆内容の住み分けを決定した。各論の執筆は、重複を避けるために総論執筆終了後とすること、通史編は2017年5月発行、資料編および『西南学院と建学の精神』は2016年5月発行とすることを決定した。学院史部会は、早速、総論の構成（目次）編成作業に入った。
2011.5	学院の創立記念式後に、第1回学院史講演会および部会の発会式を行う。	編纂委員会	第1回学院史講演会は編纂委員である塩野和夫教授（国際文化学部）が行い、その後、部会構成員が出席して部会発足を開催した（大学チャペル）。学院史講演会は、2013年11月の第5回開催で終了。
2011.8	3社による提案コンペ実施	編纂委員会	パートナーとして編纂の協力や印刷などを担当する企業を選定。編纂委員会でぎょうせい、DNP、凸版の3社に絞ってコンペを行う。学院からは編纂委員長、同副委員長、事務局が出席。
2012.1	DNPを選定	編纂委員会	データベース（デュアルシーブ）構築費約440万円、百年史編纂関連約2,450万円（いずれも概算）を決定（2017年5月刊行を想定）
2012.2	総論の目次および執筆者を決定（暫定）	編纂委員会	暫定的に総論を10章に分けて目次を決め、編纂委員を中心に各項目を2人ペアで執筆することに決定。
2012.9	英文資料の収集開始	編纂委員会	金丸委員長が米国南部バプテスト歴史古文書館に向き、資料収集。この時は、『百年史』編纂のために最低限必要な資料を持ち帰ってもらった。その後、同歴史古文書館から関連資料をデータで2回、収集した（有料）。
2012.10	体裁・字数・原稿料を決定	編纂委員会	A5判横組み、総論（各章）・各論の字数、原稿執筆料（学内者1字1円、学外者1字1.5円）。執筆料の根拠となる字数は、監修が終了した最終原稿の字数による。学内者、学外者の判断は、原稿締切日時点での執筆者の身分によることとした。
2012.12	『西南学院百年史』編纂・執筆要領を決定	編纂委員会	原稿執筆依頼の際に添付するもので、編纂の基本方針、『百年史』の仕様・書式、詳細な表記方法などを所載したもの。
2013.1	総論の目次・執筆者を最終的に決定	編纂委員会 学院史部会	総論の執筆者は、多くの教職員に参画意識を持ってもらうことや『七十年史』の反省を踏まえ、各項目の経験者には原則として執筆してもらうこととしたことで、大幅に増加した（計28人）。当初考慮していた2人のペアで担当することは1人で執筆することに変更した。
2013.3 （ 2014.3.31	総論執筆者に原稿執筆依頼	事務局	原稿執筆依頼に際しては、『七十年史』の該当部分、関連資料を添付して依頼。学院史資料のデータベース（DNPのデュアルシーブ）閲覧もできるように考慮した。

年月	実施事項	所管	詳細
2013.3	各論内容の具体的なガイドラインを決定	編纂委員会	総論の構成が時系列であることから、各論については時系列ではなく、分野別・トピック別の内容（教育・研究・学生・施設・財政など）を各項目ごとに時系列に記述することとする。ただし、各部会の決定を優先する（早緑、舞鶴については、規模が小さいこともあり、時系列で記述することを部会で決定）。
2013.4	原稿執筆料の改訂（値上げ）	編纂委員会	学内者1字2円、学外者1字3円（学外の執筆予定者から安すぎるとの声があったため）とした。
	第1回学院史研究会	編纂委員会	百年史編纂に資する研究発表会で、第9回（2015.7）まで開催。
2013.8	監修委員会設置（2014.4.1～）を決定	編纂委員会	委員構成は、歴史関係2人、キリスト教関係1人、西南をよく知る1人の4人。
2014.1	各論の目次・執筆者を決定	部会	2013年1月から断続的に各部会が会議を開催し、それぞれの目次および執筆者を決定（執筆者は計58人。前史・旧制部会は総論の内容を見て、各論を設けるか否か判断したいということで、この時点では未決定）。
2014.5 ～ 2015.9.30	各論執筆者に原稿執筆依頼	事務局	原稿執筆依頼に際しては、関連する総論部分、『七十年史』の該当部分、関連資料を添付して依頼。総論の場合と同様に、学院史資料のデータベース閲覧もできるように考慮した。
2014.5.7	第1回百年史監修委員会開催	監修委員会	監修作業は、まず監修委員会で1次監修を行った後、編纂委員会所属の2人（金丸委員長と伊原委員）および小林監修委員長の3人で構成される編纂小委員会にて2次監修を行うこととした。
2014.7	資料編の発刊時期の見直し	編纂委員会	資料編は、これまで通史編に先立って2016年に発刊予定であったが、内容の構成もまだ決まっておらず、間に合わないので、通史編発行に合わせて、2017年5月発刊とした。
	執筆者氏名記載方法の決定	編纂委員会	総論：執筆者氏名をABC順にまとめて、巻末に記載する。 各論：執筆者氏名を各章毎にABC順にまとめて、巻末に記載する。 ※監修作業によって大幅な修正が入るため、執筆者が具体的にどの部分を執筆したのかが判明しないように配慮し、原稿内容に関しては編纂委員会が全面的に責任を負うこととした。執筆者からは特に異論は出なかった。
2014.9	『西南学院と建学の精神』発刊の延期を決定	編纂委員会	2016.5発刊を予定していた『西南学院と建学の精神』は、学院史資料センター設置の決定に伴い、同センターにて発刊してもらうように申し送りすることにし、発刊を延期した。
	原稿執筆料支払い時期を変更	編纂委員会	原稿執筆料については、最終原稿（印刷工程に入る前）の字数で支払うことになっていたが、監修作業に多くの時間を要し、最終原稿に至るまでかなりの時間を要することから、第1次監修が終了した時点の字数で原稿執筆料を支払うことにした。
2014.9 ～ 2014.10	総論各章点検	総論執筆者	総論各章の執筆者に各章ごとに集まってもらい、章単位の全体的な点検（全体の流れ、各項目の量的なバランス）を行った。
2014.11	原稿料の算定基準日決定	編纂委員会	原稿執筆料は算定基準日によって学内者か学外者かにより異なってくるので、算定基準日を原稿締切日とすることを決定。
	活字の種類・大きさを決定	編纂委員会	通史編本文の活字（見出しや本文）の種類・大きさを決定。

年月	実施事項	所管	詳細
2015.4	アーキビストを採用	編纂委員会	アーキビスト（事務局系列）として職員を採用（3年契約）。2017年3月退職。
	各論「前史・旧制」は作成しないことを決定	部会 編纂委員会	3月10日に行われた第2回前史・旧制部会において「当該部分については、総論においてかなり詳細に記述されており、新たな資料も少ないことから、各論は作成しない」ことが決定されたことを受けて、編纂委員会において協議し、これを了承した。
2015.5	DVD版を作製し、製本版の「索引」は掲載しないことを決定	編纂委員会	DVD版を作製することを承認。そのことで、検索機能は補填されるので、製本版には「索引」は記載しないこと、DVD版の作製に関しては全体予算の範囲内で行うことを編纂委員会です承。
2015.6.8	第1回編纂小委員会開催	編纂 小委員会	監修委員会が行った監修結果を再監修する編纂小委員会が動き出す。2016.11.15まで計45回開催。
2015.7	国立公文書館で資料収集	事務局	事務局職員が、東京の国立公文書館において、西南学院関係の資料を収集した。
2015.8	年表の様式および掲載内容を決定	編纂委員会	年表の開始年は、米国南部バプテスト連盟の日本への宣教師派遣（1860年）からとする。
2016.4	通史編構成等の見直し	編纂委員会	①総論の第5章と第6章を合併、第7章と第8章も合併する。 ②総論および各論の最後に、学院、各学校・園、事務局の長に3,000字程度で「課題と展望」を記述してもらう。
2016.5 ） 2016.7	各論各章の執筆者による確認	執筆者	各論の執筆者が集まって各章（各学校・園・事務局）ごとに数回の会合を行い、総論と同じように、章全体の流れ、各項目の分量（字数）のバランスなどを確認した。
2016.7.29	第1回合同監修委員会開催	合同監修 委員会	これまで監修作業は、監修委員会と編纂小委員会の2本立てで行っていたが、時間がかかりすぎることから、両者合同の合同監修委員会に1本化して進めることにした。2019.2.18まで計214回開催。
2016.8	学院教職員に製本版希望アンケートを実施	編纂委員会	『七十年史』は全教職員に配付したが、退職時に返却する人が多いことや製本版の単価が高いことを考慮。製本版希望者は123人（21%）。
2016.9	製本版とDVD版の製作・配付数および配付先、販売価格を決定。	編纂委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前月に行ったアンケート結果を踏まえ、製本版900冊、DVD版1,100部を作成することにした。全体予算の範囲内。</li> <li>・教職員には原則DVD版を全員に配付し、希望者に製本版を配付することにした。</li> <li>・有償配付の価格は、他大学の百年史の価格を参考にし、製本版5,000円、DVD版3,000円、セット価格7,000円とした。</li> </ul>
	百年史刊行時期を延期		当初の2017年5月を2017年度末（2018.3）までとすることを編纂委員会で決定し、理事長宛てに文書を提出する。（常任理事会承認） ※委員会としては2017年12月発行を目指すこととした。
	各論構成を追加変更		これまでの各学校・園・事務局の6章編成に、新たに「第1章：学校法人西南学院」と「第8章：西南学院同窓会」を加えた。
	監修手当の見直し		監修に際しては、事前に自宅等で資料を確認していただく必要があることなどを考慮し、時間単位の監修手当以外に年間で60,000円の監修基本手当を支給することにした。（常任理事会承認）
2016.11	学院史資料センターへの申し送り事項を提出	編纂委員会	2016年10月に学院史資料センターが開設されたことに伴い、9項目から成る申し送り事項を編纂委員長名で資料センター長宛てに提出。
2017.2	通史編の構成および掲載順序を決定	編纂委員会	その後、編纂委員会で微修正を行った。

年月	実施事項	所管	詳細
2017.2	総論執筆者への原稿執筆料支払い通知	事務局	総論執筆者20人に総額364,272円を支払う。
2017.3	総論執筆者への原稿執筆料支払い	事務局	
2017.4	個人情報掲載の許諾	事務局	「百年史」(特に年表)では、学生・生徒のクラブ活動の成績については、全国大会優勝またはこれに準ずるものを掲載することになり、個人戦などで氏名を掲載することになった人たち(51人)に、ハガキを出して許諾を得た。その結果、37人から了解を得た。氏名掲載を拒否する回答はなかったが、残り14人については、クラブ名の記載のみに留めた。
2017.6	資料編の構成を決定	編纂委員会	歴史資料、校地・校舎の変遷(図面)、統計資料、西南資料館で構成。その後、当初は学院・各学校長・園長・事務局長は通史編の該当部分の最後にそれぞれ掲載する予定だったが、資料編に新たに「歴代役職者一覧」の章を設けて掲載することになった。
2017.9	発刊時期について	編纂委員会	編纂委員会としては、2017年12月を目標としていたが、間に合わないことが確実となり、2018年3月に変更した。
2017.10	発刊時期について	編纂委員会	9月から総論の2次監修に入ったが、思ったより時間がかかることや各論の「中・高」の原稿が出揃わないことを考慮し、発刊時期を大幅に遅らせ、2018年度中とした。(常任理事会承認)。ただし、委員会としては2018年12月発刊を目標とすることにした。
2018.1	各論執筆者への原稿執筆料支払い通知	事務局	各論執筆者40人に総額497,526円を支払う。 ただし、各論「中学校・高等学校」は、原稿の提出が遅れ、監修作業が最後になったこともあり、通知・支払いともに2018年11月となった。
2018.2	各論執筆者への原稿執筆料支払い	事務局	
2018.6	百年史の表装等を決定	編纂委員会	「七十年史」との区別を図ることもあり、題字を高校の書道教諭の山口裕史教諭にお願いすることを決定、裏表紙にはSWのエンボス加工を取り入れる。
2018.5.8 ∩ 2018.6.8	「総論」を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付(回付資料は2回の監修を終えたもので、1回目の監修終了後に執筆者の確認も終了している)。
2018.6.26 ∩ 2018.7.20	「各論」の1～4章を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付。 ※1章(学校法人)、2章(早緑子供の園)、3章(舞鶴幼稚園)、4章(小学校)
2018.9.3 ∩ 2018.9.14	「各論」の7、8章を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付。 ※7章(事務局)、8章(同窓会)
2018.9.26 ∩ 2018.10.10	「資料編」の構成を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付。
2018.10.25 ∩ 2018.11.9	「各論」の6章を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付。 ※6章(大学)
2018.11	「各論」の5章を常任理事に確認	事務局	あわせて編纂委員にも回付。 ※5章(中学校・高等学校)



年月	実施事項	所管	詳細
2018.11 ～ 2018.12	各論執筆者に最終原稿確認	事務局	大幅な修正はなかった。
2018.12.17	最後の編纂委員会を開催	編纂委員会	計62回開催（この時点では、2019.3に最後の第63回委員会を開催予定だった）。
2019.1.18	最後の合同監修委員会を開催	合同監修委員会	監修委員会79回、編纂小委員会45回、合同監修委員会214回の計338回開催。
2019.1	「通史編」（総論・各論）を責任校了	事務局	カラー写真の色校正、用紙の確認も含む。
	「通史編」のページ建て確認	事務局	ページ順が間違いないか、落丁などがないかを確認。
2019.2	「資料編」を責任校了	事務局	あわせてDVD版のパッケージデザインを校了。
	「資料編」のページ建て確認	事務局	ページ順が間違いないか、落丁などがないかを確認。
	DVD版の仕様を最終確認	事務局	付録として100周年記念祝賀会で上映した「西南学院100年の記憶」と「Ah, Seinan!」など6曲の校歌・応援歌を収録。
	「通史編」（総論・各論）の許諾および使用料支払い	事務局	「通史編」（総論・各論）で使用した新聞記事や写真で許諾が必要なものについて許諾を得る手続きを行った。（有料）
2019.3.15	『西南学院百年史』刊行	編纂委員会	実際は3月28日（木）に納品。29日（金）にDVD版を学院関係者に配付。4月に入って、製本版（書籍）を学院関係者（主に希望者）に配付。
2019.4.24	セット版および製本版（書籍）をDNPから発送	事務局	【広報・校友課】西南学院特別賛助会員（高額寄付者）〈99件〉 【資料センター】他大学、キリスト教学校、図書館、学外執筆者など〈316件〉
2019.5.7	有償配付の受付、郵送を開始。	事務局	【有償配付】卒業生など〈24件〉（7月1日現在）